氏名（本籍）	菅谷立子（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第56号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールの舞踊論
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学　助教授（音楽学部）　片山千佳子
（論文副査）	〃　教授（〃）　船山隆
（〃）	〃　〃（〃）　細野孝興
（〃）	〃　〃（〃）　三林輝夫
（〃）	〃　助教授（〃）　土田英三郎

（論文内容の要旨）

本論文は、ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールJean－George (s) NOVERRE（1727－1810）の『舞踊とバレについての手紙Lettres sur la danse et sur les ballets』（1760、以下『手紙』）を対象とした舞踊思想研究の試みである。

『手紙』は、すでに19世紀よりその重要性を認識され、また、今日の舞踊史書の大半がその存在について言及している書である。だがそうであるとすれば、なぜここで再び『手紙』を取り上げて読み解く必要があるのか－当然生じるこういった問いに対し、その最大の理由として挙げられるのは次の点であるだろう。すなわち、確かに『手紙』の舞踊史上の重要性についてはある種のコンセンサスが形成されていると言えるが、しかしその重要性をどこに見るかという点について、従来の研究の中では十分にその可能性が探られてきていないと考えられるのである。

これをより具体的に言うならば次のようになる。今日の舞踊史記述においては、ノヴェールを「バレ・ダクシオンballet d'actionの提唱者」と見なすことが定石となっている。それが目指すところは、18世紀のノヴェールを、（一貫したストーリーを機軸として劇的に展開される）19世紀バレエの先駆的な存在として位置付けることである。確かに、そのような解釈は可能でもあり、また妥当でもある。だが、解釈の固定化はともすれば他の解釈の可能性を排除しかねない。事実、『手紙』を再度詳細に検討してみると、必ずしも上述の切り口からだけでは捉えきれない問題が少なからず含まれているようにも思われる。

こういった認識に基づき、本論文においては、ノヴェール思想を考える上で最も本質的で、かつまた従来十全に論じられてきていない問題を重点的に論じることを課題とする。すなわち、「ノヴェールにおけるバレ・ダクシオンの意味」、および「ノヴェールと舞踊音楽」、という二つの問題を本論文における考察の対象とする。

「ノヴェールにおけるバレ・ダクシオンの意味」という問題は、従来の舞踊史記述に対する批判的なスタンスから設定されている。今日「バレ・ダクシオン」という概念は、「劇としての構

造を持ち、ストーリーを伝えるべく作られたバレのこと」と説明される。しかも、舞踊史においては、しばしばノヴェールの名がこの「バレ・ダクシオン」の語とともに語られる。だが、そもそもノヴェール自身が、『手紙』執筆の段階で「バレ・ダクシオン」をどのように捉え、それをどのように論じているのかは、これまで必ずしも明確に提示されてきていない。現に、ノヴェールは『手紙』の中で、「バレ・ダクシオン」という語を一度も使用しておらず、その代わりに「アン・アクシオンen action」という形容詞句を「バレ」あるいは「ダンスdanse」等々といった言葉に接続させて、ある状況を描写しようと試みている。従ってここで問われるべきはこの「アン・アクシオン」の意味、より厳密には、本来多義的な「アクシオン」という語の『手紙』における意味、ということになる。本論文では、同時代的な文脈にもその手がかりを求めつつ、この点に関する考察を進めていった。その結果、ノヴェールにおける「アクシオン」とは、①作品創作の次元と上演の次元の双方に関わる二重概念であり、②前者にあっては作品の一貫した筋立てが問題となり、③後者にあっては登場人物の情念、およびストーリーの身体的描写が問題になっていることが確認された。しかも、④前者の背後には、アリストテレス『詩学』受容の伝統、および「パラダイム的芸術」としての絵画の構成原理の反映を、⑤また後者の背後には、演劇の領域における身体表現の再評価の動きの反映を見て取ることが出来る点が明らかになった。なおこの考察結果は、もっぱら作品創作の次元のみで語られてきた従来の「バレ・ダクシオン」解釈にも修正を迫るものとなっている。

一方、「ノヴェールと舞踊音楽」という問題は、ノヴェールが『手紙』の中で体系的な議論を展開していないがゆえに従来十全に考察されることのなかったノヴェールの「舞踊音楽論」について論じるものとなっている。『手紙』執筆以前からダンサー、振付家として活動していたノヴェールの舞踊音楽論は、彼の実践的な経験、知識から出発し、さらにはより観念的、理念的次元へと展開していく。その間、彼は一貫して「音楽と舞踊のあるべき関係」を探らんと試み、結果として「作品の物語性を支える音楽」を理想として掲げるに至る。つまり彼は、舞踊音楽におけるナラティヴな機能をとりわけ重視するのである。なおこういったノヴェールの舞踊音楽観と、19世紀の舞踊音楽実践の方向性との間に連続性を見ることも可能である。この仮説に一つの根拠を与えるべく、本論文では、19世紀におけるノヴェール受容にも言及している。